

2023年4月23日高知教会説教

松浦牧師

説教:「神からでたもの」

聖書:使徒言行録5章33～42節

○はじめに

使徒言行録という書物は、弟子たちに聖霊が降って、この世界に主イエス・キリストの教会が誕生し、成長していった、その過程において起ったいろいろな出来事が描かれています。本日の箇所では、使徒たち、つまり聖霊を受けて主イエス・キリストのことを宣べ伝えていった教会の最初の指導者たちが、イエスの名において伝道をしていたという事が理由で神殿で逮捕され、公の場に引き出されて、当時の指導者たちから、裁きを受けることとなります。彼ら使徒たちは、この場において、「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」と、時の権力者を前に堂々と宣言しています。

今日(こんにち)を生きる私たちも、色々なことを信仰によって決断しなければならない時があります。もし、神様に従うか、人間に従うかを決めなければならないことがあったならば、イエス様を救い主として受けいれている者たちは、神様に従うことを望む決断をしたいと思っています。ですが、神様に従うことが、自分自身の命に関わることだったら、どうでしょうか。現在の日本に生きる私たちには、キリスト教を信じているからといって、命に関わるような信仰の決断を迫られることはありません。しかし、今でも世界の他の国では、キリスト教だからといって迫害を受けたり、命を狙われるようなことが実際に起こっています。また、戦前の戦中の日本において、キリスト教(耶蘇教)だからといって、教会や信徒が迫害を受けた時代も確かにありました。

「勇気を持って、どんな時でも神様に従いたいと願います。」と思っていたとしても、いざその時になったら、私にはそのような勇気がないかも知れません。目の前の恐怖や、不安に、すぐに屈してしまうかも知れません。私たちの命だけでなく、この身に起こる何かの誘惑や、突然の困難を経験した時、私たちは神様に従うという思いが揺らいでしまうかも知れません。それはもし、わたしの中の決意や、信念や、勇気によって、神に従おうとしているならば、そういう不安を抱えることとなります。では、私たちは一体どのようにして、神様に従うことが出来るのでしょうか。今日の箇所、とくに使徒たちの信仰の姿、に共に聞いていきたいと思っています。

○人か神か

使徒たちは、イエス様の復活を証しし、その名を多くの人々に宣べ伝えていました。これを知ったイスラエルの民の指導者である大祭司と、サドカイ派というグループの人々は、ねたみに燃えて、使徒たちを牢に捕え、最高法院、つまり裁判の法廷に引き出しました。それが前回読んだ箇所です。

使徒たちの中で、ペトロとヨハネが、以前にも捕えられて、指導者たちから「イエスの名によって話したり、教えたりしてはならない」と命じられていました。イエスの名を語るな、と命じられる。それは使徒たちにとって、神様に従ってイエスの名を語るか、人に従ってイエスの名を語らないかを定めることでした。その決断は、自分たちの命に関わる大きな決断です。しかし 5:29 にあるように、使徒たちはイスラエルの指導者たちに答えます。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」。使徒たちは、神様と人との前で、「自分たちは神様に従う」、ということを宣言しました。

そして使徒たちはこの裁判の場で、イスラエルの指導者たちが十字架につけて殺したイエスは、神様によって復活させられ、今は天に上げられて、神様のもとにいるということを語り、イエス様はあなたたちの罪の身代わりとなって十字架におかかりになった事実を突きつけたのです。このことを聞いた指導者たちは、この時、イエス様が神から遣わされた救い主であると信じなさい、悔い改めて、罪を赦してもらいなさいと、福音を告げられ、救いの恵みに招かれていたのです。

しかし、彼らはその恵みを受け入れません。33 節には「これを聞いた者たちは激しく怒り、使徒たちを殺そうと考えた」とあります。彼らは使徒たちを妬んでいました。民衆の多くが使徒たちの教えを信じ、また信じた者たちが心を一つにして互いに物を分かち合いながら生活し、人々に好意を寄せられ、称賛されていたからです。また、特に使徒たちを捕えたサドカイ派というグループは、「復活」というもの自体を否定していました。イエス様が復活した、ということが人々に広まるのは、自分たちの主張に反する、都合の悪いことでした。また、この指導者たちは、使徒たちが、自分たちにイエス様を十字架で殺した責任を負わせようとしているだけだ、と考えていました。つまり当時の宗教的指導者たちは、神様の救いの御心に目を留めるのではなく、人々からの人気や自分たちの権威に目をとめて、立場や、主張を守ることに必死だったのです。その思いで、彼らは神様に対して心を頑なに閉ざし、イエス様の福音を拒み、使徒たちに対する殺意をさらに強く抱くことになりました。

○ガマリエル

さて、使徒たちを殺すかどうかという緊張が張りつめた場面で、一人の人物が登場します。それはガマリエルという人です。34 節には、民衆全体から尊敬されている律法の教師であり、ファリサイ派に属していた、と書かれています。使徒言行録で後に登場するパウロというキリスト教の伝道者が、かつて回心する前、このガマリエルのもとで先祖の律法について厳しく教育を受けた(22:3)と語っています。

このガマリエルが、使徒たちを一旦議場から退出させて、イスラエルの指導者たちに、使徒たちから手を引くように、放っておくようにと言いました。その言葉が記されている 38~39 節をお読みします。「そこで今、申し上げたい。あの者たちから手を引きなさい。ほっておくがよい。あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ。」ガマリエルはここで、テウダと、ガリラヤのユダの出来事を例として挙げました。こ

の人物たちは反ローマを掲げてイスラエルの国で反乱を起こした者たちです。テウダは自分が偉い者のように言って立ち上がり、400人くらい従ったが、結局テウダは殺されて、従った者もいなくなった。ガリラヤのユダも、反乱を起こしたけれど殺され、従った者もちりぢりになった。それはどちらも神様の御心でなかったから、扇動したリーダーは殺され、従った者も散らされたのだ、ということです。だからこのガリラヤのイエスをリーダーとする集団も、神様からのものでなければ、じきに解体するだろう、と言っているのです。

結果として、指導者たちはこの意見に従うことにして、使徒たちを殺すことはしませんでした。ガマリエルは人々に尊敬された人物でありましたし、また民衆に称賛されていた使徒たちに手をかけることは、民衆の反発も予想されることでした。ガマリエルの顔を立てることで指導者たちは納得し、使徒たちも殺されずに済んだのです。

これは、見事なガマリエルの立ち振る舞いのように見えます。中立の立場で、しかも人間から出たものなら自滅するし、神からのものなら滅ぼされないだろうという、使徒たちの教えの真偽を神に委ねる、という結論は本当にガマリエルの信仰的な助言であり、神様に対しての純粋な思いだったのでしょうか。

そうではないと思います。そもそも、二つの例が、リーダーが死んで人々が散らされた、という話でしたが、ここにはイエスという人物も既に十字架で死んだのだから、彼に従った集団もそのうち自滅するだろう、という考えがありました。つまり、ガマリエルの挙げた例からは、使徒たちの主イエスの復活の証言を信じていない様子が受け取れます。

でもある人は、ガマリエルは、「もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかも知れない」と言っているのではないか。ガマリエルは、使徒たちの行動や教えが、神からのものかも知れないと思っているのではないか、と言うかも知れません。

しかし、本当に神に忠実で、神を畏れている人が、本気で自分が神に逆らう者となるかも知れないと思った時に、「だから彼らを放っておこう」という判断をするのでしょうか。ここでは、使徒たちが勝手に自滅するだろう、という思惑が強いように思えますし、このことで自分は神様に逆らうことにはならない、という自信が伺えます。もしガマリエルが、自分が神に逆らう者になるかも知れない、ということを実に畏れるなら、真剣に使徒たちの証言を聞こうとし、律法が収められている聖書をくまなく調べ、イエス様こそ神様が与えて下さった救い主であることを確かめようとするはずです。そうだとすれば、使徒たちに手を下さず、ただ放っておくということにはならないのではないのでしょうか。

イエス様の十字架と復活の出来事は、それを聞いた者に決断を迫ります。もちろん、それは、わたしたちにも問われるのです。イエス様が救い主であることを、受け入れるか、受け入れないか。イエス様が私たちの心の扉の前に立ってくださり、私たちの名を呼び、その扉を叩いて下さっています。その御声に聞いて私たちはイエス様を開いて招き入れるか、開かないで拒むかという決断です。

ここで、ペトロ説が聖霊を受けて語った福音の説教を聞いたエルサレムの町の人々のことを思い起こしてみたいと思います。2:36でペトロが「だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、また

メシア(救い主)となさったのです」ということを人々に語った時、人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに対して、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と言った、とあります。「大いに心を打たれた。」それはペトロが語った良い話にただ感動したということではありません。心を抉られるような痛みを感じたということです。イエス様の十字架が自分の罪のためであったと知り、神様の前で自分が犯した罪に、心が刺し貫かれ、居ても立ってもいられなくなった経験をこの時、人々は実際に体験したのです。そこでペトロは、「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい」と、人々が神の恵みに応えて為すべきことを教えました。イエス様の救いを知らされ、受け止めた者は、心を抉られます。そして与えられた神の恵みを受け入れ、神様のもとに立ち帰って、洗礼を受け、罪を赦していただくことこそが、神様の与えて下さる恵みに対して為すべきことだと聖書は示しています。

この人々とは対照的に、5:30 でペトロが最高法院でイエス様の復活を証しし、この方が救い主だと語った時、これを聞いたイスラエルの指導者たちは、激しく怒って使徒たちを殺そうと考えた。またガマリエルは、使徒たちをほうっておくがよい、と言ったのです。多くの人々がイエス様を信じた一方で、イエス様の救いの知らせを聞きながらも、自分中心に生きる人々、神の愛から目を背ける人々の、頑なな心も、ここでは示されています。

○神の御心を知るために

結局のところ、最高法院では、ガマリエルの意見に従って、使徒たちを殺すことは思いとどまったので、このガマリエルの判断は、結果として使徒たちを助けることになりました。ただ注意すべきなのは、わたしたち人間の目で、ある出来事の結果の良し悪しを判定し、それが人間からのものか、神からのものかを定めることは出来ないだろうということです。

わたしたちが、それが神の御計画かどうか、神の御心かどうかを知るには、ただ、心一つにして祈ることと、神ご自身の御言葉に耳を傾けることしか、方法はありません。聖霊の導きを祈り求め、イエス様においてご自身を示された神の御心に従うことにおいてのみ、わたしたちの営みは、困難に満ちていても、また順調にいくにしても、神様のものとして祝福され、用いられていくのです。また祈りと御言葉に照らして人の歴史の歩みを見るなら、わたしたちはイエス様の福音が語られ続けているということにおいて、それこそが神の御心であると知ることが出来ます。神様は、わたしたちにとって良い時も悪い時も、すべてのわたしたちの歩みを導いておられます。創造の時から御手の内に導いて下さり、御子を遣わして人を罪から解放し、やがて神様のご支配を完成して下さる終末の時まで、定めてくださいます、つまりわたしたちのための救いの御業を、神様は必ず成し遂げて下さるお方なのです。

○イエスの名のために

さて、使徒たちは一度退場させられた後、再び議場に呼び入れられ、鞭で打たれ、イエスの名によって話してはならないと、再び命じられて釈放されました。これは、ペトロとヨハネ

が釈放された時より、鞭打ちの刑が加わった重い勧告になりました。使徒たちの命は助かりましたが、肉体的に大きな苦痛を与えられました。しかし、釈放された使徒たちは、「イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜んだ」と書かれています。鞭打たれ、辱めを受けたことを喜んだ。これは通常では考えられないことです。普通なら、もう二度と鞭打たれたくないと思うし、そんな目に遭った自分が哀れに思えたり、イエスの名のために仕えているのに、却って酷い目に遭うことを恨んだりしそうなものです。しかし、「イエスの名のために」、自分たちが神様に従い続け、困難を受けていることは、喜びだと、使徒たちは言うのです。それは無理をして、これは神のためなんだから喜びなんだと思い込んだり、こんな困難に遭っても頑張っている自分たちを誇って喜んでいるわけではありません。

以前の使徒たちは、この時とまったく違いました。ペトロはかつて、イエス様が捕えられ、十字架につけられる時、イエス様のことを「知らない」と三度も繰り返して、その場から逃げ出しました。それまでは「イエス様と一緒に牢に入って死んでもよい」とまで言っていたのに、いざその場面に直面すると彼はイエス様を裏切ってしまったのです。

しかし、誰がペトロのことを勇気のない者だと言うことが出来るのでしょうか。わたしたちだって、身の危険を感じ、恐怖に捕らわれてしまったら、自分を守るために、個人的な熱心や決意は、脆く崩れ去っていくことをよく知っていると思います。この時、確かにペトロは、十字架におかかりになるイエス様に従うことが出来なかったのです。しかし、今やペトロは、捕えられ、危険な目にあっても、神に従うことを堂々と宣言します。「イエスの名のために」辱めを受けるほどの者にされた、と言って、「イエスの名のために」戦う者とされているのです。何がペトロを、使徒たちを、このように変えたのでしょうか。

それは、使徒たちが、復活のイエス様と出会ったからです。使徒たちが従っているのは、今も生きて共におられる、救い主、イエス・キリストです。使徒たちのため、そして、わたしたち一人一人のために、苦しみを受け、辱めを受け、不名誉な十字架の死を受け入れて下さった方です。まずこの方こそが、わたしたちのために苦しまれた。辱めを受けられた。この世の悪と戦って下さった。このイエス様の十字架の苦難にこそ、わたしたちの罪の赦しと、そして神と共に生きる新しい命があります。

○イエスに従う者となるために

私たちはこのわたしに、新しい命を下さった方に従うのです。イエスという名の方。この方のもとに、すべてがあります。十字架によって罪を赦し、そして死に打ち勝ち、復活された方。今も生きておられ、神の右に座し、すべてを支配される方です。従う者には、罪の赦しと永遠の命が与えられ、終わりの日には主イエスの栄光に共にあずかること、そして、わたしたちも復活にあずかるという希望の約束があります。

この世の何にも勝る希望を与えて下さる方が、滅びていくはずだった罪人一人一人に目を留め、出会って下さり、わたしに従いなさいと言って下さるのです。あなたの苦しみ、あなたの罪はすべてわたしが負ったから、悔い改めて、わたしが与える新しい命を生きなさい、と言って下さるのです。

すべての喜びはここにあります。イエス様に従い、イエス様と共に生きることにあるのです。その喜びを知っているなら、確かな希望を知っているなら、わたしたちは世の困難苦難を前に絶望することはありません。またこの名のために苦しむことも、イエス様が共におられるからに他ならないと知るなら、それを喜びと言うことが出来るのです。

○キリストの恵みに生かされて

もしも神に従うことが、使徒たち自身の信念であったり、主張であったり、また自分自身の勇気を奮い立たせてのことだったら、それは他の信念や主張を前に揺らいだり、誘惑にあって崩れたり、倒れたりしたでしょう。しかし、この使徒たち自身を生かし、立たせているのは、自分の内からのものではなく、外から与えられた神からの恵みであり、神からの命であり、神からの希望なのです。

神の御子、主イエス・キリストご自身がわたしたちのところに来て下さり、救いの御業を成し遂げて下さった。使徒たちも、わたしたちも、このイエス様に結ばれて一つにされているから、弱くても、勇気がなくても、臆病でも、聖霊に力を与えられて、恵みによって、神様に従っていくことが出来るのです。その喜びに生きることが出来るのです。

イエス様との交わりに生きている人々は、神を礼拝し、イエス様を証しすることを止めません。使徒たちは釈放された後、「イエスの名によって」話すなど命じられてもなお、「毎日、神殿の境内や家々で絶えず教え、メシア・イエスについて福音を告げ知らせる」いました。それが神様の御心であり、また使徒たちの喜びだからです。イエス様を救い主であると信じた人々は、神の国を待ち望みながら、神様の御言葉によって、イエス様との交わりの中で生きていきる道が与えられます。イエス様にあって心をついにし、共に祈るその教会の歩みに加えられるのです。そして、聖霊の導きによって、イエス様の福音を告げ知らせるといふ神様の救いの御計画には、この私たちの高知教会も加えられていて、共にその使命を果たしているのです。そうして神様と共に生きる者とされ、神様に従う者であること。ここに、私たちの真(まこと)の命があり、希望があり、喜びのすべてがあるのです。感謝してこの一週の歩みもイエス様と共に歩みたいと思います。